

一般の人々がインターネットを利用できるようになる二五年以上前の一九六〇年代に彗星のように登場し、世界の寵児となった人物がいる。マーシャル・マクルーハンという中世文学が専門のカナダの英文学者であるが、著書の『グーテンベルク・ギャラクシー』（一九六二）や『人間拡張の原理』（一九六四）は一〇〇万部以上のベストセラーになった。

既存の常識を粉碎した数多くの名言が人気の秘密であるが、流行したのは「メディアはメッセージ」という言葉である。一例として、商売の取引には電話も文書も利用されるし、恋人との交信も同様である。しかし、同一の内容であっても、利用するメディアによって伝達されるメッセージの意味が相違するとう説明である。

この理屈を応用して成功した企業がある。当時は商用大型コンピュータをIBM、CDC、NCRなどが開発競争をしていた。コンピュータ会社は計算機械を販売するのではなく計算能力を提供するべきだというマクルーハンの示唆により、IBMはIBM360という大型から小型まで互換可能な一群のコンピュータを開発した。

これらは販売せず賃貸にし、企業は業務の増減に対応したコンピュータを利用できるようになり、IBMは一気に世界最大のコンピュータ企業に発展した。さらに通信回線が高速になった現在では企業はコンピュータを所有せず、通信回線経由で情報処理を実行するクラウド・コンピューティング・サービスを利用している。

鉄道会社は輸送速度を高速にすることに営々と努力してきた。明治時代に東京から大阪までは二〇時間が必要であったが、大正時代には一二時間、昭和初期には九時間に短縮され、昭和後期になって東海道新幹線が開通して一気に三時間になり、工事が進行しているリニアエクスプレスが開通すれば一時間になる。

ところが長距離は飛行機と競合、短距離は自動車と競合するようになり、世界の先進諸国で鉄道は斜陽産業になりつつある。そこで登場したのが一日で移動できる距離を数日かけて移動する豪華列車で、現在は予約が困難なほどである。マクルーハンの理論を借用すれば、移動媒体ではなく移動内容へ中心が移行したことになる。

このような極端な変化をリインベント（発明しなおす）という言葉で実行してきたのがアップルを創業したスティーブ・ジョブズである。二〇〇七年の「 아이폰」の公表で「電話をリインベントした」と説明した。従来の通話のみの携帯電話に情報検索、音楽鑑賞などの機能を追加し、音声通話は機能の一部でしかない装置にした。

現在、リインベントの渦中にあるのが自動車である。電話と同様、発明から一五〇年が経過した自動車は人間による運転という特徴が消滅する直前にある。年間一三五万人を死亡させる殺人機械の操縦から解放される社会で自動車の役割の変化について明確な将来は見通せていないが、大変な変革が発生することとは確実である。

今回紹介した技術だけではなく、あらゆる技術には賞味期限が存在する。それらをリインベントしていくことは社会として重要な課題である。最初に発明する人間にも才能は必要であるが、リインベントには一層の才能が要求される。現代社会を構築している多数の技術や制度の賞味期限が接近している現在、有為な人材がリインベントに挑戦することを期待したい。